

芥川龍之介「將軍」論

— 中国旅行の収獲として —

張 静

一、序論 研究史について

「將軍」は芥川龍之介が大阪毎日新聞社特派員として中国視察旅行に赴いた一九二二年の十二月に執筆し、翌年の一月に雑誌『改造』に発表されたものである。従来の「將軍」批評は、芥川の作品論において異常なものだと言わざるを得ない。簡単にいえば、この作品は周りの人々の憤慨を惹き起こし、完膚無きまで批判されていた。主に、小説の主人公のN將軍は乃木希典將軍と照らし合わせながら否定された乃木像をめぐって論じられている。小説が発表された後七十年間の「將軍」論は、「偶像破壊」という論点に止まっていた。

この論点の中に有名な例をあげると、伊富部隆輝「私の知人の一人は「中学生の皮肉だ」と評したが私もそれに同感である」¹。芥川没後二年、宮本顕治は「この將軍は惨めにも手痛く嘲笑され諷刺されている」、「全体的な構図に根本的な欠陥」があり、それは「モチーフに小ブルジョアの限界性をもっているからだ」と評している²と評している。

ほぼ四十年が経つと、三好行雄も海老井英次も「偶像破壊」をめぐる前の論点を継承した。例えば、三好行雄は「至誠・尽忠・誠実・仁愛などという典型的な武人の通念をさまざまなエピソードによつてはぎとつてゆく」ような「偶像破壊」という言葉で、モデルと小説主人公との関係を捉えた。そして主人公N將軍の造形は「短編の寄木細工ふうな構

成がわざわざいして、全円的な人間像の肉付けには失敗している」と指摘している³。数年後、海老井英次はこう批評する。「乃木希典の像、その殉死によって現実を超越してしまったイメージ、明治の国家主義がつくりだした虚像、そうしたものなしにこの作品を論ずることは不可能であろう」、「N将軍という作者の記名の通りに読めば、実に奇妙で滑稽なスケッチがあるばかりなのである」⁴。

「将軍」研究史において「乃木批判」という定説を打破し、九十年代に入った後、「反戦小説」として位置付け、新しい「将軍」論を開いたのは関口安義である。関口安義論は「中国体験と関わる反戦小説、プロレタリア小説である」という論点により七十年間を続てきた「偶像破壊」論を超越し、「将軍」批評史における新しい一歩を進めた。

さらに新しい視座に据える研究といえは、二〇〇〇年に入つて以来、谷口佳代子が主人公N将軍は「人格のある一個人として登場しているのではなく、周りの人々の自己を反映した「時代の象徴として登場して」と評した。さらに、「将軍」はN将軍に向かつて自分自身を投影する群像を描いた作品である」とも指摘した。「N将軍という伝説化された人物を恣意的に表象することによって反戦だけでなく、精神の自由と視点の多元化の問題を提起した」という孔月の説も注目に値する最新の論点である⁷。

以上の「将軍」研究史から見ると、九十年代までのほぼ七十年間の長きに亘り「将軍」論は「偶像破壊」「乃木批判」という論点で定められた。現在から、振りかえってみるとなぜこんな凝り固まった認識に執着してきたのだろうか。おそらく、原因はモデルとして扱われたと推定される「乃木希典」という人物像にあるのではないだろうか。「乃木希典」は、明治の日本に無二の戦功を立てた国家的な英雄である。

たとえば、田山花袋は、「旅順の戦勝者乃木大将」で、「難攻不落の称ある旅順口の要塞に向ひ、勇敢無比なる敵兵と戦ひ、包囲八カ月の後、真に敵将ステッセルをして開城降伏せしめたる乃木陸軍大将の英名は、わが三千年の国史に赫々たる光を放つのみならず、世界文明史の上にも亦光榮ある一頁を占むべきこと、固より言ふを俟たず。(中略)吾人は大将の謹厳、剛毅、堅忍、よくこの大成功を収めたるを祝う」と最高の賛美をしている。

また、明治天皇の大葬の日に乃木夫婦が殉死したことで、「忠君孝国」という前近代のモラルを尽くした。こうして、乃木大将は至誠、純忠無垢、すぐれた明治武將というイメージが強く世人に印象づけられた。日本の誇りとして永遠に称賛されている。しかも、軍神のように祭られている乃木大将は、普通の偶像とは違う存在である。そこで、「將軍」を読んだ読者は、まず、N將軍を乃木大将と照らし合わせ、作者が乃木希典を否定しているというふうに取りつたのではないだろうか。これで、読者の読みは「偶像破壊」という論点に止まり、モデル乃木大将の否定像についての論を展開したのである。

それ故に、テキスト自体を冷静に深く考えることができなくなり、的確で緻密な作品分析が不可能になったのであると思う。「乃木大将」というカリスマへの先入観が無意識に存在することで作品の正確な解説に断裂が生じ、小説の真の視点から離れてしまった。

そして、「將軍」は乃木への個人攻撃だという批評を「棺を覆いて論が定まる」の如く九〇年代まで続けてきた。また、めつていうと、読者は小説の中のN將軍と現実の乃木將軍とを混在している。小説人物としてのN將軍はただ権力者、暴君、残酷を象徴する人物として設けられている。現実の乃木將軍を小説人物に投影していることは否定しないけど、この小説を読む際、この混在を分けて読むべきだと思つた。

九〇年代に入り、「中国体験」という新しい切り口を契機に定論はようやく新しい境地へ向かった。この観念を取り入れた代表的な研究者の関口安義は中国体験に準じ、「反戦小説」として視点での複数の論文を発表している。

本稿ではN將軍および他の登場人物を分析することによって、作者がN將軍を描く意図はどこにあったのかと解明する。その方法としては、今まで見過ごされてきたユゴーの詩を掘り出し、この詩に隠されている裏の意味を解明することにより新しい読みを提示したい。そして、芥川は反戦ばかりではなく、どのようにして帝国主義、軍国主義の致命的な罪悪を別出したのか。また、その認識が形成された当時の作者の創作上の心境も論じたい。

二、三人の兵士―悲惨な戦場

『將軍』は明治三十七、八年の日露戦争の旅順攻撃、奉天戦における軍司令官N將軍を扱い『白襷隊』、『間諜』、『陣中の芝居』と没後七年ほど経った時期のN將軍をめぐる「父と子」の対話という四つのエピソードから成り立っている。『白襷隊』ではかつて紙屋の田口二等卒、大工の堀尾一等卒、小学校教師の江木上等兵、三人が死地に向う際の情景は語り手によって語られている。また、「白襷隊になるのも名誉」とする田口二等卒、「酒気さへ帯びてゐれば、皮肉な事を言う」堀尾一等卒、「おとなしい」江木上等兵、こういう個性的な三人の平民兵士を設定し、死地に赴くという極限状況に臨んだそれぞれ、三人の腹の底に押し付けられた戦争情緒と臨場態度を浮き彫りにしている。

人の良い田口は、将校たちに敬礼を送られたことを名誉だと受け止める。大工だった堀尾は、「何が名誉だ」、「みんな死に行くのだぜ」と強く反発する。小学校の教師だったというおとなしい江木は、ついに「莫迦野郎！おれたちは死ぬのが役目じゃないか？」と抛りつける。以上は、N將軍が現れる前に悲壮な空気に包まれている三人の具体的な戦争情緒である。作者は、個性的に彼らの厭戦心理を哀しく描出している。N將軍が登場後、まず將軍に見つめられ、握手で励まれた田口は「殆處女のやうに」と感激し、「御国の為に捨てる命だ」と、名誉のうちに決意した。将校の敬礼に反発する堀尾は、N將軍に握手されると、「全身の筋肉が硬化したように直立不動の姿勢になった」という不思議な変化を示した。

これは、むしろ彼の内面の意識の変化が起こっていることを象徴する。おとなしい江木は、將軍の威信に激励された後の二人をみて、「おれは何の為に知らないが、唯捨ててやるつもりなのだ」「どうせ死なずにはすまないのなら綺麗に×××¹⁰やつた方が好いじゃないか？」と、絶望の淵に投げ込まれた。結局、江木はあえなく戦死した。堀尾は突撃の最中に、「萬歳！日本萬歳！悪魔降伏。怨敵退散。（中略）萬々歳！」と絶叫し、頭部銃創のために発狂した。

N將軍の煽動とそのカリスマの光の輪の下に、厭戦情緒を抱いていた平民兵士は名誉のため、国のため命を捨てるまでに意志を逆転させる。生死を選択する自由がない兵士たちは、死ななければいけないと覚悟することに至った。決死

した悲壮感に満ちている。戦場上の兵士たちの命は、戦争の道具のような軽微なものだと作者に暗示される。

奥野久美子の考証¹¹によると、「將軍」における兵士の厭戦情緒は作者が加えたものだ。「將軍」という小説は、作者が「芥川龍之介「將軍」考―桃川若燕の講談本『乃木大将陣中珍談』(三芳屋書店 大正一・一〇)に負う作品だとわかった。奥野によると、『白禪隊』の時間、場所、状況などの基本的設定は『乃木大将陣中珍談』を参照したものであり、兵士の批判的戦争観は、作者の創作であると指摘する。そこで、兵士の戦争批判からは、作者の意図も自然に浮かび上がってくる。

つまり、作者は厭戦的な兵士と扇動者のN將軍との構図を示している。將軍は自身のカリスマ性を生かして体を肉弾になれと、厭戦的な兵士たちを激励した。ここで、將軍のカリスマ性が役を果たしたところは、厭戦気分を逆転して死に向かわせろうという意識の転換にある。言い換えれば、自己欺瞞、戦死、発狂など惨烈な結果を合わせて考えると、兵士を死なせる羊皮を覆う狼のような將軍の本来の姿がうかがえるのではないだろうか。

つぎに、作者はこの『間諜』で「狡知」、「モノマニアックな眼」、「殺戮を喜ぶ」など言葉で冷血、残虐なN將軍像を彫り刻んでみせている。そして露探を処刑するとき、田口一等卒は銃をかざしたまま「故郷へ別れを告げている」支那人の露探をどうしても突き刺せなかった。人を斬るのを楽しみとしている曹長に向かって、N將軍の「斬れ！斬れ！」という命令が下され、その下で処刑が成され執行した。その処刑場面は、主に平民の田口一等卒、曹長とN將軍の三人によって処刑が行なわれた。

しかし、人道的に考えれば、田口はなかなか露探の首を斬ることができなくて滞った。モノマニアックな將軍と、「殺戮を喜ぶ」曹長が見事に解決した。この後、不思議なことに人の良い田口は「この×××らばおれにも殺せる」と思うようになった。直ちに彼にこんな劇的な変化をもたらしたことは、軍人たちが平気で首を切ることに、或いは殺戮の喜びから受けた直接の影響だと考えてよいだろう。

そして、この影響の浸透の速さも驚愕させるほど興味深いものだと思う。おまけに、穂積中佐が目の変質的なN

將軍に対して反感を抱き始めると作者は詩的に描いている。穂積中佐は欧州で留学体験をもつ軍人である。同じ軍人も彼のN將軍への反感は西洋の素養、価値判断が彼の頭に併存していることに起因する。一方、N將軍は完全に日本帝國主義に育成され、自分の命すら国のものだという絶対服従までに至った。

これに対して、外国で教育を受けた穂積は、帝國軍人になってもN將軍を冷静な眼で眺めている。作者はここで新しい帝國軍人を呈している。最後、穂積中佐は感慨したあげく、スタンダールの言葉が頭に漂ってくる。「あれだけ勲章を手に入れるには、どの位の×××な事ばかりしたか」とひそかに沈思する。作者は、首を斬ることができなかった田口一等卒、首を斬るのを喜ぶN將軍と曹長及び首を斬ることに反感がうごめく穂積中佐という対立な三種類の人物を造型した。

紙屋だった、即ち、庶民に初めて首を斬ることができなかったという人物の設定は、N將軍と曹長とが現した殺戮の正当性と喜びを突出するためである。また、欧州に留学体験をもつ穂積中佐の反感も、帝國軍人の輝きの裏を曝すことになる。つまり、作者はこのような対立する立場から、軍人の殺戮の本質を反射し抉出することをこの作品の中に書き下したのである。

三、「陣中の芝居」―惨めな観客

「余興の演芸会を催す時、会場には大勢の兵卒が集っていた。(中略)殆看客と呼ぶさへも皮肉な感じを起させる程みじめな看客に違いなかった。が、それだけ又彼等の顔に、晴れ晴れした微笑が漂っているのは、一層可憐の気がするのだった。」¹²

芝居が始まる前に、兵士たちを描くことで、可憐な陣中雰囲気を漂わせる。N將軍も今日その眼に人懐こい微笑が浮

かんでいる。これを読むと対照的に前の処刑場で將軍のモノマニアック眼を思い出させる。看客が芝居（男女相撲、濡れ場）に熱中するときに、N將軍が「何だ、その醜態は？幕を引け！幕を引け！幕を！」と「余興をやめ！幕を引かんか？幕！幕！」と突然激しく叱咤を発した。みじめな看客たちが楽しんでる芝居は、慌てて終えられ、英雄物語を演じる芝居に換えられた。中佐は看客の兵士たちに憐憫を寄せ、將軍に外国人の武官とともに不可解と軽い侮蔑を感じた。しかし、中佐は外国人の武官たちの將軍への不可解には同感なのに將軍への不満は少しも流露させず、「下品ですから、——將軍は下品な事は嫌いなのです」で、お茶を濁した。

三幕目の「ピストル強盜清水定吉、大川端捕物の場」が始まった後、N將軍の顔は「以前より遙かに柔し^{やま}みを湛へていた」に変化が起きた。さらに、国のため死んでも悔恨しない巡査の演出に深い感激し、「偉い奴じゃ。それでこそ日本男児じゃ」と、涙の痕が頬に光っているほど感激した。穂積中佐は「將軍は善人だ」と、軽い侮蔑の中に明るい好意も感じ始めた。この「善人」はN將軍の単純あるいは將軍のナシヨナリズムから現れた性格の純粹と、理解しても差支えないだろう。將軍は、ナシヨナリズムに浄化された軍人である。邪魔なものを体内から引き出され、必要なものしか埋められない実験用の標本に類する。

それゆえ、外界を疑うアイデンティティが抹殺され、ナシヨナリズムに換えられることになったであろう。中佐が感心した「善人」とは、將軍が持ち味の「人懐い」ような人間の資質への発見であると思う。最初、兵士たちに憐憫を寄せた中佐は、將軍にも憐憫を仄かに覚えたかと思わざるをえない。自己の本来の人間性が見えず、命令を立派に執行する偏執的な將軍しか現れないものだから。

この『陣中の芝居』において、「みじめな兵卒が好きなものを楽しむ自由がない」と、N將軍が完全に帝国日本のイデオロギーを体現する単純な「忠君」を生き甲斐にすることが、軍人だということが明らかに描かれているのだ。

N將軍の涙は心まで帝国日本に改造され、純粹に「忠君愛国」という封建的なモラルを崇拜させることを意味する。また、將軍が完璧にこういう帝国軍人になったということは、將軍の「至誠の人間」という氣質からきたものと考えら

れる。こんなN將軍の側面だからこそ、中身は帝國主義の「忠君愛國」という國家イデオロギーに入れ換えられ、眞心で國家に貢献する軍人が育まれた。言い換えれば、軍國主義に改造され、人間性さえ取り除かれた至上の作戰機器だともいえる。自由が奪われたみじめな兵卒に比べて將軍は冷酷、人情がない軍人と見えるが、実は將軍は徹底的に帝國日本に犠牲になった人間と理解しても間違いないだろう。

穂積中佐は、かつて西洋思想を受けていた。即ち、日本帝國思想に完全に覆われている軍人ではない。それ故、中佐は実に出場の外に立つて内を冷静な目で観察することが可能である。將軍に対する、「哀れ」「感傷的」のようなものも、中佐の中に潜在するであろう。中佐は苦笑しながら、ユゴーの歌を想起する。この歌は確かに愛の歌だが、勢力者が弱者を誘惑することは、はつきり伝えられている。¹³

詩をじっくりと読んでいくと、詩人に歌われている「罪惡の誘惑」が読者の前に満開の花のように現れる。ロジャー伯爵は、神秘的な性的幻想及び貴族の極上な日常を用いて田舎娘を誘惑する。ロマンチックな色彩に満ちている一枚の黒色のビロードの如き豊麗な誘惑だと感じられる同時に、美麗な罪惡の香りもほんのりと漂う。この詩において、ユゴーはこの罪の誘惑をロマンチックな手法で描いている。また、この誘惑において、このロジャー伯爵とN將軍とが同じく國家へ奉仕するプロパガンダを担う役割を示唆することである。扇動者と扇動される人との間には、逞しい権力者と草一本のような弱い人間との甚だしい対照が存在する。

中佐はユゴーの歌を思い出すことは単に各『將軍』論で批評されたような西洋のインテリではなくて、権力者が強大の力を用いて弱小なもの判断力をごまかし、扇動、誘惑することへの覚醒及び見極めが、彼の中に密かに蠢かしているからだと考えられる。これは、中佐の最初の「苦笑」から反感に進んだN將軍が代表する軍事への最終の理性的弁別である。同時に、偉大な日本の國家主義、植民主義などを見抜いたとも断定できるであろう。だから、ユゴーの歌の連想は、決して中佐が帝國主義の日本へ疑いを抑えることではない。¹⁴ N將軍に対して、こんな純粹な帝國軍人には始終至ることができないという異質な軍人をわざと設定されたのではないだろうか。

四、父と子

時間は大正七年に設定され、西洋風の応接間で中村少将（かつての中村少佐）と大正青年の息子との間にN將軍をめぐって会話が進められた。

「・・・省略・・・。閣下はお前がたの思ふように、決して一介の武弁じゃない。」

少将は楽しさうに話し終ると、又炉の上のレムブランドを眺めた。

「あれもやはり人格者かい？」

「ええ、偉い画描きです。」

「N閣下などとはどうだろう？」

青年の顔には当惑の色が浮んだ。

「どうと云つても困りますが、——まあ、N將軍などよりも僕などに近い気もちのある人です。」

「僕は將軍の自殺した気もちは幾分かわかるような気がします。しかし、写真をとつたのはわかりません。まさか死後その写真が、何処の店頭にも飾られる事を、——」

省略

「それは酷だ。閣下はそんな俗人じゃない。徹頭徹尾至誠の人だ」

「・・・省略・・・。唯その至誠が僕らには、どうもはつきりのみこめないのです。僕らより後の人間には、猶更通じるとは思われません。・・・」¹⁵

父子がN將軍に対する会話の進行による其々の意見を交換した。最後、気まずい沈黙の後、中村少将が「時代の違い」という言葉で片付け、話題を転換した。言うまでもなく作者の芥川は、この青年を借りてN將軍すなわち乃木將軍に所持する挑戦的な意見をはつきり述べた。息子は、自由を信仰する新時代の青年である。父は天皇、將軍などを崇拜する

忠君愛国を人生の道德基準とする、旧近代モラルに生きてきた人間である。父にとって自由を主張する人なんて放肆、無礼、無知な未熟児である。

この観念上の相違は、最後「時代の差」で父に片付けられてしまった。つまり、新旧時代を代表する父子はお互いに自説に固執する。二人の沈黙或いは対峙のうちに、大正青年の自己信仰を堅持する意気込みも伝わってきた。中村父子の間に生じた世代間のギャップのような観念の差は、明治と大正との時代精神の差を象徴すると言えよう。N将軍は人間の自由を抹殺し、兵士を作戦機器として取り扱う軍国を代表するものである。中村青年は、N将軍の殉死及び記念写真を撮ることに完全に不理解を示す。つまり、大正からの新世代は、旧近代モラルを受け入れることができない。明治の終結にしたがって、旧近代の倫理、道德なども破滅を迎えた。中村青年が言った「僕らより後の人間には、猶更通じるとは思われません」。この文は明治までの日本のモラルは必ず反対された上、覆されるだろうというヒントを与える。

「大正青年」という設定は周知のように白樺派の人たちのことを指す。武者小路は「白樺」の後記でこんな感想を述べた。「乃木大将の殉死はある不健全なる時が自然を悪用してつくり上げたる思想に育まれた人の不健全な理性のみが讚美することを許せる行動である」また、武者小路が東大在学中に学習院で演説する時、「人間が人間の価値を知らないところからいろんな不幸が起る。一番人間の価値を知らないものは軍人です。」といい放ち、聴いている乃木院長の顔をにらみつけた。

明治十八年生まれ武者小路は「明治」の時代精神に既に反感を抱き、人間尊重を大正の新時代思潮として宣伝した。明治二十五年生まれの芥川も白樺派の精神を受け止め、白樺派同志の立場から殉死したN将軍に疑問を持つ、少将の息子という大正青年を造型したわけである。少将の息子にとってN将軍よりレンブラントのほうが近い。

言い換えれば、大正青年は軍人より芸術家に憧れている。軍人と芸術家との根本的な違いは、命令を絶対に服従することと、自己を主張することである。命令を服従することは自らの自由意志を無くして、命令を受けることだけが軍人の基本である。芸術家が創作した芸術品には、必ず表しようとする個性が含まれている。また、個性はそこの中に存在す

る自由意志に支えられる。芸術家の生き甲斐は自己を主張することが基本である。即ち、ここで自由の問題が作者に提起されている。芥川は一九二五年の『改造』に「あらゆる至上主義に好意と尊敬とを持つ」¹⁶を書いた。

唯僕の望むところはプロレタリアたるブルジョアたるを問わず、精神の自由を失わざることなり。敵のエゴイズムを看破すると共に、味方のエゴイズムをも看破することなり。こは何人も絶対的にはなし能はざるところなるべし。されど不可能なることにあらず。プロレタリアは悉く善玉、ブルジョアは悉く悪玉とせば、天下はまことに簡單なり。簡單なるには相違なけれど、——否、日本の文壇も自然主義の洗礼は受けし筈なり。誰か又賢明なる諸公に自明の理を云云せんや。

また、一九二二年大阪毎日新聞社の派遣視察員として中国へ三ヶ月半くらい旅行していた。北京で、中国の新文化運動の提唱者である胡適と二回会った。話題の一つは、作家の自由問題である。日本の作家は官憲から作家の創作自由をもらっていないが、中国の作家が享受している自由はかなり大きいと芥川が胡適に自分の苦情を言った。それ故、芥川は自由を求められなくて苦悩していた作家であることは疑いをさしはさむ余地がない。

自由を求めることは、まず、「自己」というものが存在することでもあるから。自由を持つてからこそ自己主張を実現することが可能である。こういうことで、自由を求める人間と自由を剥奪する権力者との闘いは避けられない。「自己」を意識し、求め始めたのが近代の兆しの一つである。こういう個への目覚め、人間性を尊重することはルネサンス期のイタリアに起源したヒューマニズムに遡ることができる。

だから、人道主義、人間尊重はヨーロッパの十八、十九世紀のヒューマニズム風潮に影響された近代日本のインテリが追求していた理想である。芥川はヒューマニズムという点から日本の帝国主義、国家主義などを観察し、戦争を反対することは当然である。母国の百姓兵士に着目し、反戦の視点を兵士の厭戦に置き、せつば詰まった凄愴を描出する。

小説において、兵士たちを死に向かわせたり、芝居を楽しむ自由まで奪ったりするN將軍は残虐な人しか読みとれない。しかし、N將軍は殉死という仕舞で一生「忠君愛国」を守り抜いた。「忠君愛国」を生き甲斐にするN將軍も、実は可憐な犠牲者であると髣髴として思われているのではないかと思う。中村少将の息子はN將軍が殉死する際に、写真を撮ることに不理解を示した。N將軍にとって殉死ということは世間に教育的な意味があるから、残したわけである。

とにかく、N將軍は「死」を実行するときでも軍人教育を怠らず、写真という形で世間に「忠君愛国」の模範を残した。N將軍の一生を考えると、実に「忠君愛国」という筋金入りの四つ文字の下に輝かしく生きてきた。そして、軍神として子孫が永遠に称賛していく。一方、国民英雄のN將軍は、徹底的に帝国の軍国主義により改造され、「忠君愛国」というモラルを入れ替えられた軍人でもあると言えよう。

したがって、N將軍は自由を意識することが不可能な人間であると判断できる。こう見てくると、N將軍は陣中のカリスマであると同時に最大の無自覚の犠牲者でもある。これは、中村少将が思い出している將軍の人懐こい一側面から味わうことができるであろう。作者は、帝国側から帝国主義の罪悪を抉り出し、裏付ける。

N將軍を理解できない大正青年もN將軍へ聊かの疑問を抱く穂積中佐も、西洋思想に接触している新時代の日本人である。中村少将、穂積中佐、少将の息子という三人の年齢層が時代の転換を象徴している。おまけに、時代の転換にしたがって三人のN將軍への反応は天皇制の帝国主義、軍国主義などに抱いた違和感も段々強くなる傾向が呈する。しかも、N將軍に対する中佐の一人の冷静な感嘆と息子の強烈な反感、否定とが鮮明な対比になっている。

つまり、時代の変化にしたがって、天皇制の帝国主義、軍国主義政策などは、必ず抵抗され、続かなくなると作者は暗示している。また、作者は日本の帝国主義、植民地主義が旧時代の疾患として、必ず世界発展の主流から外れることを予想している。これは芥川が旅行先の中国で世界の社会、政治動向を総合的に観察した上、帝国日本の対外軍事、政治の政策を見抜いた結果である。上海の西洋を見た芥川は、租界というものに大変反感を持っている。気に入らない原因は租界が国の侮辱であるとは一番考えられる。武力で他人の国に闖入してすべて思うとおりにやっていく。これは覇権、

侵略行為だと芥川に見られる。中国はまさに俎上の鯉のように侮辱されている。人道主義者の芥川は上海にいる外国人には不満を覚えざるを得ない。正義感が強い芥川像が浮き上がっている。任務された新しい中国の様子は当然見てきたが、日本の対中政策も見過ごすことのできない問題点として視野に入れられた。例えば、

「蜜の幼虫は蝸牛を食ふ時に全然蝸牛を殺してはしまはぬ。いつも新しい肉を食ふ為に蝸牛を麻痺させてしまふだけである。我日本帝国を始め、列強の支那に対する態度は畢竟この蝸牛に対する蜜の態度と選ぶ所はない。」¹⁷

また、「僻見」¹⁸でこう書いた。

「上海で訪問した時、章炳麟が芥川にこう言った「子の最も嫌悪する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民にも多少の反感を抱かざるを得ない。」、「先生はまことに賢人である。省略 この先生の一矢はあらゆる日本通の雄弁よりもはるかに真理を含んでいる。」

芥川はこの訪中によって改めて日本の帝国主義の侵略、強権の本質を見定めることになった。しかし、作者は帝国軍人のN將軍にメスを入れ、忠君愛国を信仰するN將軍を帝国日本の最大の犠牲者と看做し、反証法で帝国主義、軍国主義の内部からそこに隠されている強権、欺瞞性を曝した。忠君愛国、勤皇、富国強兵、国粹主義など帝国のモラルで築き上げた明治国家は疑う、侵犯すべからざる神聖たる帝国である。

したがって、ある種の強権が明治帝国の成立に従って下意識に存在し、自らの思想、行動に対する目に見えない感化作用を及ぼしている。且つ、絶対強権には免れがたい欺瞞が潜みがちである。作者はヒューマニズムの立場から帝国日本に利用されたN將軍を通して、日本の帝国主義の本質を暴露し批判した。

五、おわりに

今回、小説「将軍」を読んでこの本論を綴ることとしたが、このように理解している。兵士に死に向かわせるN将軍と芝居を楽しむ権力を奪うN将軍を通して、帝国のカリスマにおける欺瞞、強権を作者は指摘する。さらに、このカリスマのN将軍は実は、最大の犠牲者でもあった。作者はヒューマニズムという点から帝国主義の人間性を抹殺する強権、侵略、欺瞞など罪悪の本質を抉り出した。

中国旅行の後、芥川は反戦の意識を持つことになったというより、むしろ戦争をしかける日本帝国主義、軍国主義、国家主義の侵略本質を見抜き、その中に潜在する人間性を踏み躪る強権、欺瞞性を曝け出した。また芥川は、帝国側から帝国主義、植民主義など必ず時代の発展の主流から外れると見ている。したがって、「将軍」は最近、言われたような芥川の反戦小説というよりも、人間社会における強権、欺瞞を批判する作品だと思ふ。

注

- 1 伊富部隆輝「芥川龍之介論」『新潮』一九二三年九月、後『現代芸術の破産』収録（関口安義「将軍」論より、注（5））
- 2 宮本顕治「敗北の文学―芥川龍之介氏の文学について」『芥川龍之介全集 別巻』―筑摩書房、一九七一年（八六頁―一〇三頁）
- 3 三好行雄「作品解説」『藪の中・将軍』角川文庫 一九六九年五月（関口安義「将軍」論より、注（5））
- 4 海老井英次「将軍」『芥川龍之介必携』三好行雄編 学燈社 一九七五年二月 一一〇頁
- 5 関口安義 特集・芥川龍之介再発見―没後八〇年「将軍」論―反戦小説の視点の導入 解釈と鑑賞七二・九 二〇〇七年九月（二三八頁―一四五頁）
- 6 谷口佳代子「芥川龍之介『将軍』論―「時代」を生きる群像」『福岡大学日本語日本文学』第十一卷二〇〇一年十二月（一一一頁―一二二頁）
- 7 孔月「偶像の時代・精神の自由―芥川龍之介「将軍」における〈中間的〉まなざしの意味」『文学研究論集』二〇〇七年三月（二九二頁―二九九頁）

8 田山花袋「日露戦争実記」四十九号・一九〇七年一月 三頁

9 テキストの引用は『芥川龍之介全集』第八巻により 岩波書店 一九九六年六月（一五七頁—一八七頁）

10 ×は検閲のよる伏せ字。原稿は紛失しているので、筑摩版の全集は伏せ字の注釈を行なってみた。

11 奥野久美子「芥川龍之介「將軍」考—桃川若燕の講談本『乃木大将陣中珍談』との比較」国語国文 七二・三 二〇〇三年三月（八七〇頁—八八九頁）

12 (9)に同じ

13 ユゴーの詩は最初、一八二六年十一月パリで出版された『Odes et Ballades』に収録されたものである。

「ぼくの話聞いてくれるね、マドレーヌ」 Ecoute-moi, Madeleine !

(Odes et Ballades: Les orientales / Victor Hugo Libr. Ollendorff 一九二二年、三三三〇頁—三三三二頁)

ぼくの話聞いてくれるね、マドレーヌ—

L'hiver a quitté la plaine

冬は平原を去っていったよ

Qu'hier il glaçait encor.

昨日はまだ凍らせていたけどね

Viens dans ces bois d'où ma suite

この森においで。ぼくの随員はここから帰ってゆへよ

Se retire, au loin conduite

遠くへ、角笛の定めない音に導かれて

Par les sons errants du cor.

おいで—マドレーヌ

Viens ! on dirait, Madeleine,

春の息吹でバラが色づくよ

Que le printemps, dont l'haleine

そんな春が、今宵は君の気に入るように

Donne aux roses leurs couleurs,

花でいっぱいその衣装を揺り動かしたかのようだよ

A, cette nuit, pour te plaire,

ヒースの生い茂った荒野の上でね

Secoué sur la bruyère Sa robe pleine de fleurs.

もしぼくが、おお、マドレーヌ

Si j'étais, ô Madeleine,

その純白の羊毛が君の指の下ではぐれる子羊だったら！…
もしほくが、君の甘い呼び声を追って
空を舞う小鳥だったら…

L'agneau dont la blanche laine
Se démantèle sous tes doigts ! ...
Si j'étais l'oiseau qui passe,
Et que poursuis dans l'espace Un doux appel de ta voix ! ...

もしほくが、おお、マドレーヌ
トンプレーヌの敬虔な告解場の修道僧だったら、
君の口が彼の耳元で
前夜の君の罪の処女のような告白を漏らすとき…

Si j'étais, ô Madeleine,
L'ermite de Tombelaine
Dans son pieux tribunal,
Quand ta bouche à son oreille
De tes péchés de la veille Livre l'aveu virginal ! ...

もしほくに、おお、マドレーヌ
夜の蛾の目があったら
君が眠りにつくときや、
そして慎みのないその羽が君の密かな小部屋の
透明なガラス窓を叩くときに、

Si j'avais, ô Madeleine,
L'œil du nocturne phalène,
Lorsqu'au sommeil tu te rends,
Et que son aile indiscrette
De ta cellule secrète Bat les vitraux transparents

君の胸が、おお、マドレーヌ
鯨骨のコルセットから開放され
ついに黒いビロードから自由になるとき、
そして裸の自分の姿を見るのが怖くて
君が、無邪気な娘よ、君のドレスを鏡に投げかけるときの！

Quand ton sein, ô Madeleine,
Sort du corset de baleine,
Libre enfin du velours noir ;
Quand, de peur de te voir nue,
Tu jettes, fille ingénue, Ta robe sur ton miroir !

もし君が望むのであれば、マドレーヌ、
君の住まいは小姓や従者たちでいっぱいになるだろう、
そして君の美しい小さな礼拝堂の
天井の弓形の石も
モレアに隠れて見えなくなるだろう

Si tu voulais, Madeleine
Ta demeure serait pleine
De pages et de vassaux: Et ton splendide oratoire
Déroberait sous la voûte
La pierre de ses arceaux !

もし君が望むのであれば、マドレーヌ、
君の頭巾を飾るマヨラナの代わりに
伯爵夫人か男爵夫人の冠を被ることもできるだろう
真珠は花の形でね！

Si tu voulais, Madeleine,
Au lieu de la marjolaine
Qui pare ton chaperon,
Tu porterais la couronne
De comtesse ou de baronne,
Dont la perle est le fleuron !

もし君が望むのであれば、マドレーヌ、
ぼくは君を城主の奥方にしてもいいのだよ
ぼくはロジュエ伯爵なのだから
君にはぼくのためにその藁葺きの家を去ってほしいよ
このぼくに羊飼いいなくなってほしくないのならね！

Si tu voulais, Madeleine,
Je te ferais châtelaine:
Je suis le comte Roger.
Quitte pour moi ces chaumières,
A moins que tu ne préfères
Que je me fasse berger !

中佐は自己保身のため、ユゴーの詩を連想したと谷口佳代子はこう分析している。(穂積中佐はN將軍と職業軍人であるという点で同列にある。仮にここで將軍のモノメニアックな眼の持つ意味を追求し根本的な人間性批判を試みるなら、將軍と同列にある自分も当然その批判の対象となる。(中略)その追求は自己保身のために棚上げされてきたと想定できる。) 出典…注(6)に

同じ

(9) に同じ

15 後に「プロレタリア文芸の可否」と改題。『芥川龍之介全集』第九卷 岩波書店 一九九六年七月(二七五頁―二七七頁)

17 「支那」『保儒の言葉』『芥川龍之介全集』第十三卷 岩波書店 一九九六年十一月(二七頁―二〇二頁)

18 芥川龍之介「僻見」『芥川龍之介全集』第十一卷 岩波書店 一九九六年九月(二八七頁―二一六頁)